技術派のウィッチ

Third—F

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦争において、家族を失うというのはよくあることなのかもしれない。ただ、それを受け止められるかは別の問題である。

いいタイトルが思いついたら変えます。

設定が公式の内容に反しないように出来るだけ情報収集に努めて参ります。ただ、問題があればその都度修正します。

文才はないので注意

目次

原作開始前
第一話：はじまり ―― 1
第二話：ウィッチへの決意 ―― 4
第三話：訓練 ―― 8

原作開始前

第一話：はじまり

私が戦う理由があるとするなら、家族を守るためと答えるだろう。
ありきたりかもしれないが、私の人生の大部分を占める楽しかった日々の事を思えば当然の事。
だからこそ力がなくとも空に飛び上がるんだ。
復讐をするために。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「・・・これで良し！おじさーん！トラクター修理終わったよー！」

　少女は耳と尻尾をしまい、作業着の袖で額に流れる汗と油を拭きながら近くで畑を耕す人に向けて叫ぶ。

「おおっ！あっという間に直ってしまった。さすがはモニカだな！」
「私にかかればちょちょいのちょいだよ！」

　モニカと呼ばれた少女はふん！と鼻息を出しながら自慢げにそう答える。
　モニカホフマンは今年で９歳になる機械いじりが好きな女の子である。両親は農場経営者であり、そこで働く小作人が使用するトラクターの修理を終わらせた所だった。
「ねぇねぇ！また新しい機械を発明したからうちに遊びに来て！」
「へぇ〜そりゃあすごいな。モニカのお父さんにもお礼言わないといけないいし、今度伺うよ。」
「うん！絶対来てね！」

モニカと約束した小作人は修理してもらったばかりのトラクターに乗り込み、畑仕事に向かった。
それを見送ったモニカは作業道具をまとめ、鼻歌を歌いながら家に帰っていった。

〜〜〜

「お父さん！お母さん！ただいま！」
「おかえりなさ…まあ！そんなに体を汚れちゃって…」
「今度おじさんが私の発明品を見に来てくれるんだよ！
「またそんなもの作って！少しは女の子らしくしたらどうなの？」
「はっはっは！いいじゃないか。モニカにとってはそれが楽しいみたいだし。」
「もうあなたまで…」
モニカが家に着くと両親が出迎えてくれた。父はポズナニアに住む農場経営者で、農業機械の導入し小作人に貸与して作業させているため、他の農場と比べ稼ぐことが出来ている。
母は若い頃にベルリンの郵便局で働いていたが、旅行に出かけた際に父とすれ違った父に一目ぼれ。そのまま猛アタックの後に結婚。父の農場経営を支えている。
「もうすぐ夕食が出来るから、さっさとシャワーを浴びて体をきれいにしてきなさい。」
「はーい！」
シャワーを浴びたモニカは家族三人と夕食を囲み、食事を楽しんだ。モニカにとって、この時が何よりも幸せと感じる瞬間であった。
「ところでモニカ。小学校を卒業したらどこに進学するつもりだい？」
「実科学校だよ！色んな技術を学んで色んな機械を作って、みんなの役に立ちたい！」

「まあなんてことなの!?進学するならギムナジウムにしなさい！そうすればもっと良い所で働けるのよ？」
「やだ！私は機械に触るのが好きなの！勉強ばっかりはいや！」
「なあモニカ。機械を触るだけが役に立たないことはないんだよ。機械を作るのにも数学だったり、化学だったり、色んな技術が混ざり合って出来ているんだよ。それに…」
「それに？」
「モニカは色んな発明をするじゃないか！ギムナジウムに行けば、もっと新しい物を作れるようになるんだよ。」
「ほんとに？」
「本当さ！そうすれば父さんも母さんも、他のみんなもモニカの発明品で助けることが出来るんだよ。」
「わかった！私、みんなを助けるために頑張る！」

こうしてギムナジウムに進んだモニカだったが、２年後にウィッチとしてネウロイとの戦いに臨むことになる。

第二話：ウィッチへの決意

モニカがギムナジウムに進学して早２年。特別に成績が良いわけではないが、数学が良くでき、親元から離れ友達と仲良く日々を過ごす。そんなよく見る学生となっていた。

怪異による異変がここ最近起きるようになりなんとなく不安を覚えていたモニカではあったが、まだまだ１１歳の少女である。勉学に励み、友達とおしゃべりすれば、そんなことはすぐに忘れた。

１９３９年８月、黒海に発生した怪異がカールスラント南東に位置する中小国のダキアに上陸した。国際連盟はダキアに上陸した怪異を「ネウロイ」と命名。第二次ネウロイ大戦の勃発である。

９月には上陸されたダキア、モエシア、オストマルクも陥落し、カールスラントにもどんどんネウロイが迫っていた。

１９１７年以来の大規模なネウロイによる侵攻に対し、戦力にもまだ余裕のあったカールスラントとはいえ、ウィッチの募集を開始した。

「モニカちゃんまた居眠りで先生に怒られたの？」

「えへへ。徹夜で機械いじってたら授業中しか寝る時間がないもん。先生の子守歌も最高でね～」

「それは子守歌じゃなくて授業の説明だよ!?まったく…ところでさ！掲示板に貼ってあったポスター見た!?」

「見た見た。カールスラントは君を求めている！だってさ。外でもウィッチがカールスラントを救う！とか、世界を守ろう！だとか。いろいろやってるよね。」

教室で友人とおしゃべりをしていたら、カールスラント軍への募集をかけるポスターについての話題になった。ウィッチは志願制のため、徴兵が出来ない代わりに募集活動に力を入れているため、モニカの通うギムナジウムにも募集活動が積極的に行われている。

「女子寮に張り出されるってことは、きっとウィッチの募集をしてるんだよね。モニカちゃんはウィッチの才能あるんだから志願したりしないの？」
「いやだよ～ネウロイと戦うのなんて…」
「どうして？」
「だって怖いじゃん！怪我したら痛いし、もしかしたら死んじゃうかもしれないんだよ！それに、お父さんとお母さんに会えなくなったりでもしたら…」
モニカの目に涙が滲みだす。
「わー！わかったわかった！私が悪かったから泣かないで！…モニカちゃんってホントにパパとママのこと好きだよね！」
「うん！大好き!!」
「でもこんな話を先生の耳に入ったりでもしたら…」
「大変な目に合うね～」
「どんな目にですって・・・？」
「「!!!」」

二人の話し声以外の声が聞こえ、声の方に振り返ると普段教室で見慣れている先生の顔があった。
「せ…先生！これはその…」
「モニカ。あなた魔法力あるのにウィッチにならないの？」
「ウィッチになって戦うと死ぬかもしれないんですよ先生！それに魔法力もたくさんあるわけじゃないし、国のために戦うなんてとても…」

モニカはうつむきながら答える。

「私は普段から国のために勉強しなさいってしつこく言ってますけど、別に国家主義者でもなんでもないわ。国のために戦えなんて言わない。でもね、先生は魔法力をモニカが持っていることがとても羨ましいの。」

「羨ましい？」
「そう。私が学生だった頃はちょうど世界大戦が起きていたの。たくさんの怪異が現れて、大勢の人々の暮らしを破壊してたの。私が住んでた町も、仲良くしてた友達もね。」
「えっ」

驚いたモニカは顔を上げ、先生に向ける。

「私にはウィッチの才能もないし、周りに合わせて逃げ惑う事しか出来なかった。怪異に襲われている時、私はウィッチが助けてくれたけど友達は間に合わなかった…」
「…」
「もし私に力があればあの子も助けることが出来たのにって思うの。だからウィッチになれるあなたが羨ましいのよ。」
「だから、私にウィッチになれって言うんですか!?」

モニカは先生に向けて強く話した。先生にかつての友達の仇を取ってくれって言われているようで。

「そうじゃないわよ。前線に出て、ネウロイと戦えば生きて帰っては来れないかもしれない。それを分かってるのに無理強いさせることなんて出来ない。でもね、あなたの隣にいる友達を守る。家族を守る。助ける力があるのに、使わずに後悔するよりも何倍もいいんじゃないかって先生は思うの。」
「家族を守る…」
「モニカちゃん…」

確かに、家族を守る。目を閉じるといつでも浮かんでくる両親と囲んだ夕食の風景。あの尊い時間を守れるのであれば、力が少なくとも家族だけでも守れるのであれば、ウィッチになってもいいのかもしれない。家族には反対されるかもしれないが、家族を守るためだったら

きっと許してくれるはず。

「決めました先生！私、ウィッチになります！魔法力も少ないし、頼りないかもしれないけど、せめて家族だけでも守れるようになります！」

「私の事は？」

友達が顔を膨らませながらモニカの頬を引っ張る。

「も…もちろん守るよ！だから引っ張らないで～！」

こうしてウィッチになることを決意したモニカは軍のウィッチ募集所に向かい志願兵として訓練生となった。

１９３９年、９月末のことである。

第三話：訓練

「おい！射撃中にストライカーの出力がぶれてるぞ！次！」
「はい！行きます！」

１９３９年１０月、ウィッチと成るべく志願したモニカ軍曹は、カールスラント南部ミュンヘン近郊にあるウィッチ訓練生用の訓練場にて飛行訓練を行っていた。
モニカは妨害気球を避けながら、射撃目標用に塗装された気球に向けて装備しているｍｇ４２を向け射撃を行う。
発射された弾丸は気球に命中し、気球を破裂させた。しかし、教官ウィッチからは檄が飛ぶ。

「モニカ！命中させたのは良いが、中心からは離れてるぞ！ネウロイはもっと小さいのだからこれでは当たらんぞ！よく狙え！次！」
「うう…」

モニカは多数の訓練生が並ぶ列へ移動した。普段であれば連続して射撃を行う訓練だが、ネウロイとの戦争の激化により（プロパガンダ映画の影響もあるが）ウィッチへ志願する者が激増。また、練度の高いウィッチは前線へと配属されていくため、各地で教官１人に対して数十人規模で訓練を実施する事になり、ひとりづつ交代で指導を受ける事になっていた。
ただ、待機中もホバリングしているため魔法力の練習も兼ねている。

「すごいねモニカ！あんなジグザグに動きながら命中させるなんて。私は一旦止まらないと当たらないのに！」
「たまたまだよ～。的は大きいし、止まってるから当たるだけ。実際にネウロイと戦う事になれば教官の言うとおり中々当たらないと思うよ。それに動きながら撃てるようにならないと止まった時にネウ

ロイに狙い撃ちにされちゃうもん。」
「モニカもまだまだなんだなぁ」
「こらそこ！おしゃべりをしない！」
「「す…すみません！」」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

　訓練が終了し、訓練隊宿舎に戻ったモニカは消灯時間までの間、同期の訓練生とお喋りしていた。

「そういえばモニカ、その胸につけているブローチかわいいね。誰からのプレゼント？」
「お父さんとお母さんからのプレゼントだよ。長く会えなくなるから写真入りなの！ほら！」

　そう言ってブローチのボタンを押し、中にある写真を同期に見せた。モニカを真ん中に据えた家族三人が写っていている写真である。みんなこちらを見て微笑んでいる。

「へぇ〜家族からのプレゼントかぁ。私は髪飾りを訓練にでる時にもらったんだよね。」
「そっちの髪飾りも素敵だよね！」
「でしょ！出かける時にお父さん大声で泣いててさ、思わず笑っちゃったよ。」
「心配だからしょうがないよね。私も訓練場所を伝えたら驚いてたもん。」
「だよねぇ、ここって結構前線に近いもんね。」

　モニカたちのいる訓練場はバルカンから侵攻するネウロイとの前線が他の訓練場より近く、進軍してきたネウロイに攻撃を受けるので

はないかとモニカは心配していたが、カールスラント軍のウィッチ航空隊は列強の中でも練度が高いため、ネウロイの侵攻を食い止める事に成功していた。ただ、こちらから攻め込むこともできずにいた為、戦線は膠着したままである。

「でも訓練が終わって前線に出てネウロイと戦うようになったらちょっと怖いかも。」
「シールドがあるとはいえ、死んじゃうかもしれないと考えるとね～」
「大丈夫だって！ここでしっかり訓練すればガランド大尉やルーデル大尉みたいな名だたるエースウィッチのように活躍できるようになれるよ！」
「私ガランド大尉のプロマイド持ってる！」
「えっほんとに？見せて見せて！」
「ガランド大尉ってヒスパニア戦役でネウロイを１００機以上撃墜したウィッチだよね？そんなウィッチのプロマイドどこで手に入れたの!?」
「えへへ…それはね…」

こうして仲間とともにモニカはウィッチになるため訓練を続けた。家族を守るために。